

# Newsletter 6

February 2026 no. 6

CCI 文部科学省科学研究補助金  
基盤研究 (S)

アフリカ狩猟採集民・農牧民の  
コンタクトゾーンにおける子育ての  
生態学的未来構築



CCI Grant-in-Aid for Scientific Research (S)



Ecological future making of childrearing in contact zones between hunter-gatherers and agro-pastoralists in Africa

## 目次 Contents

### 活動報告

海外派遣報告 .....	03
主な業績 .....	08
受賞 / 関連イベント .....	09

事務局より / 表紙を語る .....	11
---------------------	----

## 本プロジェクトウェブサイトのお知らせ

アフリカ狩猟採集民・農牧民のコンタクトゾーンにおける子育ての生態学的未来構築



<https://www.cci.jambo.africa.kyoto-u.ac.jp/efm/>



## 海外派遣報告 2025.10-11

**高田 明** (京都大学大学院 アジア・アフリカ地域研究研究科 教授)

派遣先: ボツワナ・グアテマラ / 派遣期間: 2025/10/20 - 11/10

令和 7 年 10 月 20 日から 11 月 10 日にかけて、おもにボツワナのハンシー、ニューカデ村、およびグアテマラのアンティグアを訪問し、アフリカ狩猟採集民・農牧民のコンタクト・ゾーンにおける子育ての生態学的未来構築にかかわる現地ワークショップ（ハンシー）とフィールド・エクスカージョン（ニューカデ）、および世界人類学連合 (WAU) でのパネル（アンティグア）を組織した。

ハンシーでは、現地での準備を経て、ボツワナのコンタクト・ゾーンにおける社会再編、特に（ポスト）狩猟採集民の子どもの社会化と在来知識の再活性化に関する課題について、まずボツワナの（ポスト）狩猟採集民の居住地に近い地方都市 Ghanzi で 10 月 29 日にワークショップ “Study of future making among the Batswana in contact zones” を行い、プロジェクト関係者、現地住民、その他の関係者の方々と一緒に議論を行った。

ワークショップの第一部では、まずボツワナ大学の Andy Chebanne 名誉教授と高田が上記の主旨についてのイントロダクションを行い、さらに 5 名のボツワナ大学の関係者と 2 名の京都大学の関係者が個別の発表を行った。ボツワナ大学と京都大学は、長年教育研究に関する協力を進めてきている。そうした長期にわたる協力関係を反映して、これらの発表では、ボツワナの遠隔地域やそこで暮らす人々の持

続的な発展に研究者がどう貢献できるか、コンタクト・ゾーンにおける言語実践の特徴やその変化、少数派の言語の正書法を定めることに関する理想と現実、ボツワナにおける教育制度の特徴とそれに対するノン・フォーマル教育の潜在的な可能性、これまで見逃されてきた少数派の民族における詩的な言語実践や多様な民話の特徴を記述・分析していくための構想、新しいメディアを通じて民話の物語りを行うことにより在来知識を再活性化する試み、などについての活発な議論が行われた。

ワークショップの第二部では、（ポスト）狩猟採集民でもある現地住民、ローカル NGO や地方政府のメンバー、ボツワナ大学と京都大学の研究者らが 4 つのグループに分かれ、「あなたの地域の子どもたちは、非公式な学習環境でどのように学んでいますか?」「あなたの地域の子どもたちは、公式な学習環境でどのように学んでいますか?」「非公式な学習と公式な学習をどのように結びつけることができますか?」「あなたの地域について、他の人に知ってほしいことは何ですか?」といった問いについての意見交換を促すグループ・ディスカッションが行われた。それぞれのグループで活発な議論を行った後は、各グループの代表が他のグループの前でそうした議論を要約し、さらなる意見交換を行った。



Andy Chebanne ボツワナ大学名誉教授による開会の挨拶



グループワーク後の意見交換

## 海外派遣報告

さらに翌日の10月30日には、京都大学のチーム（ワークショップ参加者である野口朋恵さん、石川航大さん、高田を含む）が長年調査を続けてきたフィールドサイトでもあるNew Xadeを上記のワークショップ参加者が訪問するフィールド・エクスカージョンを行った。具体的には、同地でノン・フォーマル教育を推進するイヤ・グイシ、フォーマル教育を推進するキョエン・プライマリー・スクール、野口さんや高田がお世話になってきた住人の方々の居住プロットなどで、子どもの教育や社会化に関する活動や課題などについての視察と意見交換を行った。



ニューカデでの住人の方々との意見交換

今回のワークショップとフィールド・エクスカージョンで得られた知見については、本プロジェクトやその関連のさらなる活動を通じて、一層の深化と発展を達成していくことを目指している。

その後、南アフリカ、米国を経由して、グアテマラのアンティグアへと長距離移動を行った。アンティグアでは、世界人類学連合(WAU)の年次集会に参加した。WAUは国境を越えた人類学を活性化させる包括的かつ協力的なフォーラムとして結成された組織である。今回は、筑波大学准教授であり、高田の元指導院生でもある田 暁潔博士と高田が、“Reuniting Body, Mind, and Environment: An Anthropological Take on Children’s Total Health”というパネルをオーガナイズした。このパネルでは、田博士と高田に加え、本プロジェクトで研究員を務めた田中文菜博

士（現、九州大学/JSPS特別研究員PD）や本プロジェクトで京都大学に長期招へいを行った Haneul Jang 博士（Toulouse School of Economics, リサーチ・フェロー）など、計7名が話題提供を行った。話題は、“Nurturing children’s sound physical and moral development in (post-)hunter-gatherer society: Preliminary research findings among the G|ui and G||ana in central Botswana”（高田博士），“Managing Risks: Ethnographic Insights into Self-Care in Maasai Children’s Daily Lives”（田博士），“Singing caregiving behavior among the central African hunter-gatherers”（田中博士），“Childcaregiving and Children’s Well-being Among the BaYaka Hunter-Gatherers and Yambe Fisher-Farmers in the Republic of the Congo”（Jang 博士）などフィールド、トピックとも多岐に渡っており、対面およびオンラインでの参加者と子どもの包括的な健康についての活発な議論が行われた。



研究発表を行う田中文菜博士

今回の WAU 会議は、開催地が中米の歴史ある街アンティグアであったこともあり、スペイン語圏の研究者との交流が深まったことやその研究の雰囲気や歴史に触れることができたことも収穫である。さらにアンティグアの中心部にある The National Museum of Art of Guatemala (MUNAG) では先史時代から植民地期に至る広範な歴史・文化資料や同地のアーティストによる現代美術の展示が行われており、そこから多くの知的な刺激を得ることが出来た。

## 海外派遣報告 2025.11

以上、今回も積極的にアクション・リサーチと研究成果の発表を行い、充実した滞在となった。これを可能にしてくれた関係諸機関や人々に感謝したい。



The National Museum of Art of Guatemala (MUNAG) のモニュメント

### 田 暁潔 (筑波大学体育系 准教授)

派遣先: グアテマラ / 派遣期間: 2025/11/02 - 11/10

2025年11月3日から8日にかけて、世界人類学連合2025年大会 (World Anthropological Union (WAU) 2025 Congress) に参加するため、グアテマラのアンティグアを訪問した。本大会では、健康や教育、言語、移民、人間と環境、技術と社会、感情、法と社会、フェミニズムなど人類学の領域で扱われてきた幅広い22のテーマが設けられ、それぞれのテーマの下でパネルが企画された。この大会で、京都大学の高田明教授とともに、「身体と心と環境の再統合: 子どものトータルヘルスに対する人類学的考察 (Reuniting Body, Mind, and Environment: An Anthropological Take on Children's Total Health)」というパネルを企画した。このパネルは、大会の第13番目のテーマ「健康の人類学: 医学文化、ウェルビーイングとケア (Anthropology of Health: Cultures of Medicine, Wellbeing, and Care)」に位置づけられており、このテーマにおいて唯一、子どものウェルビーイングに注目したものであった。

わたしたちのパネルは、子どものウェルビーイングを個人の生理学的健康状態だけでなく、社会や環境とのつながりから包括的に検討することを趣旨としていた。具体的には、三つの設問からウェルビーイングを再検討した。



会場への石垣道路

(パネル情報: <https://www.waucongress2025.org/panel/?id=328>)

- 異なる地域社会において、子どもおよびその親は、健康や子どものウェルビーイングをどのように定義しているのか。

## 海外派遣報告 2025.11

2. 心理的発達における身体の役割, ならびに身体的発達における心の役割とは何か. 小規模社会の人々は, 身体と心の相関関係, そしてそれらが子どもの健康とウェルビーイングに果たす役割をどのように捉えているのか. さらに, 子どもたちは日常生活のなかで, ローカルな健康・ウェルビーイング概念をどのように実践しているのか.
3. 子どもの健康とウェルビーイングにとって, どのような人々, またどのような社会文化的要因が重要なのか. 大人や他の社会的存在, さらには非人間的的存在を含め, それらはどのように子どもの健康とウェルビーイングの形成過程に関与しているのか.

開催当時, 自分を含む7名の研究者が研究報告を行った. 研究発表では, コンゴ, カメルーン, ボツワナ, ケニア, グアテマラでのフィールド調査の事例が紹介され, 異なる地域社会における子どもの健康の捉え方や, 健康と関連する子育て方針, 子どもの成長, 身体運動, 疫病と治療など, 多側面から子どものウェルビーイングの多様性と複雑性を検討した. そして来場者とともに, 衛生領域を中心としたウェルビーイングの既存概念の限定性について, 批判的かつ刺激的な議論を展開し, 盛況のうちに開催することができた.

本大会ではまた, スポーツ人類学領域のパネルから子どものウェルビーイングを考えるためのヒントを得た. とりわけ, 高田教授とともに, スポーツ人



パネル開催時の様子

類学者であるトーマス・カーター (Thomas F. Carter) 氏と面会する機会を得た. カーター氏は, スポーツ人類学および「スポーツを通じた開発」研究の分野で国際的に知られる研究者である. 面会では, 本パネルの議論, とりわけ非西洋地域で展開されている体育教育や, スポーツを通じた開発実践といった特定の社会的環境における子どものウェルビーイングの捉え方について意見交換を行い, 重要な示唆と助言を得ることができた.

以上, 本大会への参加とパネルでの議論を通じて, 子どものウェルビーイングを多角的に検討する貴重な機会を得た. 今後は, これらの知見を基盤として, ケニアでのフィールド調査をさらに進め, 子どものウェルビーイングの議論を深めていきたい.

### 高田明 (京都大学大学院 アジア・アフリカ地域研究研究科 教授)

派遣先: ベルギー / 派遣期間: 2025/11/16 - 11/22

令和7年11月16日から11月22日にかけて, ベルギーのリージュを訪問し, 国際会議 “Transmission and learning: How do children engage in ritualised daily practices and rituals?” に参加した. この国際会議は, 子どもの限界を先験的に想定することなく, 子どもと大人の間や子ども同士で知識や技能を伝達し, 学び合う過程と経験について,

とりわけ儀礼的な文脈に注目しながら考察することをねらった学際的なものである. 高田は Scientific Committee の一員として, 企画段階からこの国際会議に関わってきた. 国際会議を主催したリージュ大学は, 子どもの人類学や人間-環境関係についての優れた研究を行ってきており, その点でも本プロジェクトにとって重要な位置づけにある.

## 海外派遣報告

高田は、“To play and to construct social life” というパネル・セッションで“Playful imitation of ritualistic activities among the children of !Xun in north-central Namibia”というタイトルの発表を行い、ポスト狩猟採集民における社会化との関連で宗教的な儀礼や農牧民の生活習慣が世代を越えてどのように再編されるかについての議論を行った。このパネル・セッションでは他に、政治的な抑圧が強かった時期のウルグアイにおける子ども時代と玩具に注目して民衆の政治的抵抗の知恵を論じた発表やメキシコの先住民における儀礼的な生活の再構築の試みに子どもがどのように参加しているかを論じた発表があり、報告者の関心が高い儀礼や遊びと社会化の関係について刺激的な議論が展開された。またこれらの発表は、報告者が直前に訪れていたラテン・アメリカ（同年11月前半にグアテマラを訪問した）の事例を扱ったものであり、その点でも興味・関心を引かれるものであった。



高田によるプレゼンテーション

国際会議の前後には、主催者の中心人物であり、旧知の研究者仲間でもあるリエージュ大学のÉlodie Razy博士やフランス国立持続的環境研究所 (IRD) のCharles Édouard de Suremain博士、Razy博士の大学院生で子どもと環境との関係性の発達について研究を進めているMarie Montenair氏らと最近の研究成果や研究関心についての意見交換を行った。これらは生態学的なアプローチから子どもの未来構築について論じる本プロジェクトの関心とも共鳴するもの

で、非常に有意義であった。またリエージュはローマ時代から続くとされる古都であり、さまざまな時代に建築・改築された基督教の教会や石畳の多い街並みからヨーロッパの歴史を改めて考えさせられた点でも有意義な訪問であった。

以上、短い滞在ではあったが、積極的に研究成果の発表や研究上の交流を行い、充実した滞在となった。これを可能にしてくれた関係諸機関や人々に感謝したい。



丘の上から眺めたリエージュの街並み

詳細：派遣報告一覧



## 主な業績

### 論文

Chua, M., Naing, W., Nyambe, IA., Banda, K., [Harada, H.](#) 2025. Transmission of fecal contamination to stored drinking water in unplanned settlements in Lusaka. *Journal of Water Health*, 23(11): 1355–1367. <https://doi.org/10.2166/wh.2025.077>

### 基調講演・招待講演

原田英典. 2025. アジア・アフリカの水・衛生－サニテーションの価値－. 大学教員ビジット授業. 2025年11月17日.

[Takada, A.](#) 2026. Wayfinding in the Kalahari desert: Storytelling and emotion expression about the places among the G|ui/G|ana. Paper presented at La deuxième séance du séminaire “Des ‘ethno’ aux ‘anthropo-choses’: épistémologie et anthropologie des savoirs pratiques,” EHESS, Marseille, France. 9 February 2026.

[Takada, A.](#) 2025. Environmental perception, language, and gesture: Storytelling and emotion expression about the places among the G|ui/G|ana. Paper presented at the lecture series “60 facts of anthropology”, University of Cologne, Germany. 25 November 2025.

高木智世. 2025. 日常会話の中の「混沌」に見る秩序—日本語淀み形式の相互行為的分業体系—. シンポジウム：混沌としたデータのなかに意味を見出す. 日本語用論学会第28回大会. 2025年11月30日.

### 学会発表・学術報告等

Chua, M., Naing W., Nyambe, IA., Banda, K., [Harada, H.](#) 2025. Association of stored tap water contamination with direct and indirect media in peri-urban Lusaka. IWA Water and Development Congress & Exhibition 2025. Bangkok, Thailand. 8–12 December 2025 (11 December).

[Harada, H.](#) 2025. Onsite ROS: Experiences from long-term acceptability of UDDTs in Malawi, Bangladesh and Vietnam. IWA Water and Development Congress & Exhibition 2025. Bangkok, Thailand. 8–12 December 2025 (11 December).

Hattori, K., Miyauchi, S., [Hashiya, K.](#) 2026. Strategies to encode environmental sounds into language with developmental change. BCCCD 2026. Budapest, Hungary. 15–17 January 2026 (16 January).

Kameya, Y., [Yamauchi, T.](#) 2026. Barriers to Menstrual Health and Hygiene among Students in Yaoundé, Cameroon: An Assessment of Water, Sanitation and Hygiene Infrastructure and Sociocultural Factors. The 3rd International Cameroon and Japan Workshop: Menstrual Health and Hygiene in Urban Slums and Indigenous Communities in Cameroon. 4 February 2026.

Nyambe, S., [Yamauchi, T.](#) 2026. Co-creating water, sanitation, and menstrual health knowledge in Zambia: Community voices and traditional practices. 第5回国際GSIシンポジウム：先住性・先住民文化遺産・グローバルヘルス. 2026年1月24日–25日(1月24日).

Sai, A., [Yamauchi, T.](#) 2026. Intergenerational transmission of

menstrual knowledge among men: A qualitative study of Baka hunter-gatherers in Cameroon. 第5回国際GSIシンポジウム：先住性・先住民文化遺産・グローバルヘルス. 2026年1月24日–25日(1月24日).

Sai, A., [Yamauchi, T.](#) 2026. Open Education, Silent Sources: The Dual Structure of Menstrual Knowledge Transmission Among Baka Men Slums and Indigenous Communities in Cameroon. The 3rd International Cameroon and Japan Workshop: Menstrual Health and Hygiene in Urban Slums and Indigenous Communities in Cameroon. 4 February 2026.

杉山麻, 門屋俊祐, 三浦尚之, 原田英典, Banda, K., 浅田安廣. 2025. ザンビア・ルサカ市周縁地域の環境媒体に分布するロタウイルスAの遺伝子型推定. 第62回環境工学研究フォーラム. 2025年12月3日–5日(12月4日).

高田明. 2026. 音楽の起源としての養育者－乳幼児間の身体的リズムの協応. 規範性の起源を探る研究会. 2026年1月28日.

[Takada, A.](#) 2025. 14th colloquium of ecological future making of child rearing: The Data We Have, The Data We Need. Kyoto University, Kyoto, Japan. 14 November 2025. (Organizer).

[Takada, A.](#) 2025. Playful imitation of ritualistic activities among the children of !Xun in north-central Namibia. Transmission and Learning: How Do Children Engage in Ritualised Daily Practices and Rituals? Liege, Belgium. 17–18 November 2025 (18 November).

[Tanaka, A.](#) 2025. Singing caregiving behavior among the central African hunter-gatherers. The panel Reuniting Body, Mind, and Environment: An Anthropological Take on Children’s Total Health, the World Anthropological Union (WAU) Congress. Antigua, Guatemala. 3–8 November 2025 (5 November).

[Tanaka, A.](#) 2025. Intergenerational cultural transmission through songs and dances among the Baka hunter-gatherers in Cameroon. Poster presentation at Transmission and Learning: How Do Children Engage in Ritualised Daily Practices and Rituals? Liege, Belgium. 17–18 November 2025 (17 November).

Tian, X. 2025. Managing Risks: Ethnographic Insights into Self-Care in Maasai Children’s Daily Lives. The panel Reuniting Body, Mind, and Environment: An Anthropological Take on Children’s Total Health, the World Anthropological Union (WAU) Congress. Antigua, Guatemala. 3–8 November 2025 (5 November).

山内太郎. 2025. 地域共創によるサニテーションの仕組みづくり：プラネタリーヘルス時代のボトムアップ・アプローチ. 第40回日本国際保健医療学会学術大会：いたばしから世界へ—地域社会に根差したSDGs. 2025年11月1日–2日(11月1日).

[Yamauchi, T.](#) 2025. “Sani-Camp 2025”—Online Event for Future Leaders: Local-knowledge Relating to Water, Sanitation and Hygiene (WASH) and Zero-emission. Sani-Camp 2025. 12 December 2025.

[Yamauchi, T.](#) 2026. Knowledge systems and community resilience and community resilience: Global health and human ecology perspectives on environment infrastructure Environment, Infrastructure, and Wellbeing. 第5回国際GSIシンポジウム：先住性・先住民文化遺産・グローバルヘルス. 2026年1月24日–25日(1月24日).

## 主な業績 / 受賞 / 関連イベント

山内太郎. 2026. 第4回 排泄の自然誌を編む研究会 公開シンポジウム: 流す/残る 排泄物のゆくえと価値 (総合討論登壇). 排泄の自然誌を編む研究会. 2026年1月30日.

Yamauchi, T. 2026. Building an International Platform Based on Indigenous Knowledge: Introduction of a New Collaborative Project and the Faculty of Health Sciences, Hokkaido University. The 3rd International Cameroon and Japan Workshop: Menstrual Health and Hygiene in Urban Slums and Indigenous Communities in Cameroon. 4 February 2026.

横山ちひろ, 武田千穂, 川崎章弘, 孟憲巍, 小林洋美, 橋彌和秀, 堀裕亮, 井上一村山美穂, 植松明子, 林拓也. 飼育下マカクサルにおけるヒト視線感受性の個体差とその神経基盤. 日本人間行動進化学会第18回大会. 2025年11月29日-30日(11月30日).

### 新聞記事等

(原田英典先生の活動についての紹介記事)  
衛生問題をジブンゴトに. 気づきをもたらす行動変容. 2025. JICA Magazine 2025年12月号. pp.10-11.  
[https://jicamagazine.jica.go.jp/article/?id=202512\\_3f](https://jicamagazine.jica.go.jp/article/?id=202512_3f)

(原田英典先生の活動についての紹介動画)  
水が命を奪う日常. 2025. YouTube @withPlanet\_asahi. 2025年11月21日.  
[https://youtube.com/shorts/eX7B\\_go1m14?si=BOIUqvKoukPn6EZx](https://youtube.com/shorts/eX7B_go1m14?si=BOIUqvKoukPn6EZx)

### 受賞

杉山 麻, 門屋俊祐, 三浦尚之, 原田英典, Banda, K., 浅田安廣. 2025. 第62回環境工学研究フォーラム 優秀ポスター発表賞. 第62回環境工学研究フォーラム. 2025年12月3日-5日(12月4日).

### CCI データセッション

第129回 2025年11月24日(月)

Zoomによるオンライン開催(京都大学大学院 アジア・アフリカ地域研究研究科)

発表者: 高田 明(京都大学大学院 アジア・アフリカ地域研究研究科)

「Ecological Future Making in Africa: Self, Group, and Environment」

第130回 2025年12月1日(月)

対面・Zoomによるオンライン開催(京都大学大学院 アジア・アフリカ地域研究研究科)

発表者: 戸田美佳子(上智大学 総合グローバル学部)

「カメルーン狩猟採集・農耕社会における借金と互助に関するデータ分析」



第131回 2025年12月5日(金)

対面・Zoomによるオンライン開催(京都大学医研1号館)

発表者: 橋彌和秀(九州大学)

「私と野生動物とは相互理解したのか?」



## 関連イベント

### 第132回 2025年12月8日(月)

対面・Zoomによるオンライン開催(京都大学大学院 アジア・アフリカ地域研究研究科)

発表者: 高村伸吾(立命館大学)

「彼岸と此岸を架橋する: インフラ再建を通じた呪術の世界との交点」



### 第134回 2026年1月13日(火)

対面・Zoomによるオンライン開催(京都大学大学院 アジア・アフリカ地域研究研究科)

発表者: 林 剣鴻(大阪大学 人文学研究科博士後期課程)

「本の読み聞かせ活動における子どもの身体的参加」

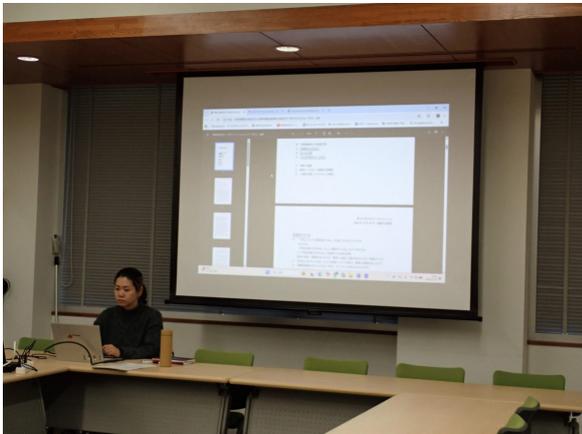


### 第133回 2025年12月15日(月)

対面・Zoomによるオンライン開催(京都大学大学院 アジア・アフリカ地域研究研究科)

発表者: 高村(井上)真衣(京大 ASAFAS 特定研究員)

「タンザニアにおける青少年の人生: 不確実な将来への実践」



### 第135回 2026年1月15日(木)

Zoomによるオンライン開催

発表者: ふくだぺろ(京大 ASAFAS 特定研究員)

「国家と戯れる社会—トウワ・ピグミーの未来構築」

## 事務局より

Newsletter の第 6 号をお届けします。CCI データセッションは、12 月から 1 月にかけて連続的にセッションを開催しました。海外出張報告では、2025 年 11 月にはグアテマラでのアンティグアで開催された世界人類学連合 (WAU) でオーガナイズしたパネルや同じく 11 月にベルギーのリージュで開催された

国際会議に関する報告をお届けしました。2026 年 1-3 月には、Hangula Simon HANGULA さん (Senior Conservation Scientist, Ministry of Environment forestry and Tourism, GRN) が博士論文のとりまとめのためナミビアから来日し、ASAFAS に滞在されています。

### 表紙を語る



車を洗う 2 人の兄弟。このトヨタのハイラックスは、火に焼べるための薪を集めに前日オフロードを走らせたばかり。泥や砂埃をかぶって薄汚れた車体が、2 人の若い男性の手でみるみるうちに磨かれていきます。彼らから「車を洗わせてほしい」と頼まれたため、私は了解し、じっとその様子を見つめていました。

彼らの日常生活において、火はとても重要な存在。そのため、長時間安定して火持ちする良質な薪が求められますが、それはこの地（ボツワナ共和国のニューカデ）で暮らす人びとならほとんど誰しもが考えること。家から近くて質の良い薪は、あらかた取られ尽くされています。しかし、車はそんな地理的制約を簡単に飛び越え、かつ一度に大量の物を運ぶことができるという運搬能力にも優れているため、時折私は薪集めに駆り出されることがあるのです。

そんな“車”という存在は彼らの目にどのような映っているのか。ひとつ言えるとしたら、それ

は単純に「車が好きである」ということなのかもしれません。短時間とはいえ、炎天下のなか、彼らにとって貴重であるはずの水や洗剤を使って、わざわざ自分たちの所有物ではない車両を丹念に磨き続ける姿。薪集めに行ったお礼なのか、綺麗に元の状態に戻して返すことがしきたりとされているのか、詳細はわかりませんが、車に対する愛情があることは確かなようです。さらに、車を使って薪集めに行きたいと願う背景には、不特定多数の人びとが一箇所に集住したことで、近くに良質な薪がほとんど生えていないことが理由だと彼らは言います。しかし、薪集め以外の理由で車を出すように誘ってくることを考慮すると、彼らの本当の望みは「車に乗ること」にあるのかもしれない。

ニューカデのとある家庭の敷地内にて

車を洗う兄と弟

2025 年 10 月 7 日撮影

撮影者：石川 航大



ニューカデ郊外での薪集め（2025年11月11日）撮影者：石川航大

**Newsletter** no.6

February 2026

2026年2月27日発行

編集・発行：高田明（研究代表）

E-mail: [cci.takada.lab@gmail.com](mailto:cci.takada.lab@gmail.com)

